

Title	戦艦大和の記憶と地域社会に関する社会学的把握/記述
Sub Title	
Author	塚田, 修一(Tsukada, Shuichi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.70 (2010. ) ,p.147- 149
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成21年度博士学課程生研究支援プログラム研究成課報告書
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000070-0147">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000070-0147</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

とすることで、戦後日本社会の中で核廃絶を唱えることの問題性をより鮮明に表面化することができると考えている。

#### 注

- 1) 八木 (2006) において、被爆体験を他者に向かって長年語ってきた被爆者を対象に彼女らがどのように語ることに配慮し、またいかなる意識を持ち語り続けてきたかと問うことで、被爆者の戦後の経験を明らかにした。最も重要な点は「被爆者はつねに被爆者としてのみ生きているわけではない」ということである。対象者は被爆者であると同時に、つながりのある他者との関係により異なる多様な役割を遂行する生活者であるからだ。この提示を通して被爆者の観点到に徹底的に内在するという筆者の研究の基本的視座を明確に打ち出した。

#### 文献

- 藤原帰一, 2001, 『戦争を記憶する』講談社  
 濱谷正晴, 2005, 『原爆体験』岩波書店  
 石田忠, 1973, 『反原爆 長崎被爆者の生活史』未来社  
 ———, 1974, 『続反原爆 長崎被爆者の生活史』未来社  
 Naono Akiko, 2002, *Embracing the Dead in the Bomb's Shadow*. UMI Dissertation Services.  
 野上元, 2008, 「戦後社会と二つの戦争体験」濱日出夫編『戦後日本における市民意識の形成 戦争体験の世代間継承』慶應義塾大学出版会, pp. 1-21.  
 八木良広, 2006, 「現在を生きる原爆被害者—被爆体験を語るという実践を手がかりに」『日本オーラル・ヒストリー研究』(日本オーラル・ヒストリー学会) 創刊号.  
 Yoneyama Lisa, 1999, *Hiroshima Traces: time, space, and the dialects of memory*. University of California Press.  
 (=小沢弘明・小澤祥子・小田島勝浩訳, 2005, 『広島 記憶のポリテクス』岩波書店)  
 米山リサ, 2004, 「廢墟のデザイン——「いま, ここ」のヒロシマにむけて」『季刊d/SIGN』No. 9, 大田出版, pp. 98-101.

## 戦艦大和の記憶と地域社会に関する社会学的把握／記述

塚 田 修 一

### 1. 研究の目的

本研究は、アジア・太平洋戦争に関する過去／記憶の配置状況、およびそれらと「地域社会」とが切り結んでいる関係性の様態を、歴史-の-社会学的に把握／記述することを目的とするものである。具体的には、「戦艦大和」(の記憶、あるいはイメージ・表象)と、広島県・呉市を研究対象とするが、この「戦艦大和」(の記憶)は、従来の「戦争の記憶」研究では扱われてこなかった対象であり、その意味で、本研究は従来の「戦争の記憶」研究の更新を図るという目的も有していることになる。

### 2. 研究の内容

本研究は主に、Ⅰ. 歴史的(=経時的)記述、およびⅡ. 現在的(=経験的)把握、という二つの視角により進められる。

Ⅰ. 歴史的記述: 吉田満著『戦艦大和ノ最期』[1953]から、映画『男たちの大和』[2005]に至るまでの、1945年の敗戦以降の「戦艦大和」に関するメディア言説 - 空間を辿り、「戦艦大和」の記憶／

イメージの歴史の変遷を追尾すると共に、他の「戦争の記憶／イメージ」——例えば筆者が修士課程において研究してきた「日露戦争の記憶」等——との重なり／ズレを観察し、それらの配置状況を描き出す。

Ⅱ. 現在の把握: 「戦艦大和」を建造した旧軍港都市であり、戦後は重工業都市として発展してきた、広島県・呉市という「地域社会」が主体となって2005年に開館および運営されている呉市海事歴史科学館(通称「大和ミュージアム」)を中心に、フィールドワーク(含インタビュー調査、アンケート調査)を行い、「戦艦大和」の記憶の現在、およびそれ(ら)と「地域社会」との関係性の様態を重層的に把握する。

さらに、上記Ⅰ・Ⅱを有機的に節合／重ね描きする。

### 3. 研究成果

本助成を得て、上記Ⅰに関してはメディア言説の収集と整理・分析を終え、以下の学会報告を行った。

・学会報告①「戦艦大和の表象文化—ミリタリー・カルチャーの社会学—」(第82回日本社会学会大会・2009年10月於立教大学)

さらに、以下の学会報告を予定している。

・学会報告②「戦艦大和のイメージ変容と戦後日本の戦争“感”—大和・ヤマト・YAMATO—」(第58回関東社会学会大会・2010年6月於中央大学)

以下、この学会報告①②の報告要旨をもって、研究成果の具体的記述と代えることにしたい。

・学会報告①「戦艦大和の表象文化—ミリタリー・カルチャーの社会学—」

1945年の敗戦より現在に至るまで、アジア・太平洋戦争に関する表象は、膨大に産出されてきた(いる)。それらの表象の中で、「戦艦大和」に関する表象は、現在、以下の点に於いて特異な位置を占めているように思える。すなわち、一般に広く知られている——軍艦であるにもかかわらず——ということ。また、反省や恐怖というよりは、悲劇性や英雄性が強調される、ということ。そして何よりも、アジア・太平洋戦争関連の事象としては随一と言ってもよいほどに、戦争に関する(広い意味での)“文化”—マンガやアニメやプラモデル等々、との結びつきが強いということ。

ところで、アジア・太平洋戦争に関しては、特に「戦争の記憶」、および「戦争体験」を中心として、すでに多くの、そして優れた社会学的研究が重ねられてきている(小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』、野上元『戦争体験の社会学』など)。だが、戦争に関する“文化”、すなわちミリタリー・カルチャーに照準した研究は、あまりなされてこなかった——実は、戦後日本社会の戦争認識／イメージに多大な影響を与えてきた(いる)のは、他でもない、この“文化”であるにもかかわらず。

上記の問題背景のもと、本報告では、「戦艦大和」の表象文化にゆるやかに照準を合わせ、メディア言説を主な素材として、吉田満著『戦艦大和ノ最期』に始まり、松本零士『宇宙戦艦ヤマト』を経由し、映画『男たちの大和／YAMATO』に至るまでの“通時的追尾”と、広島県呉市の「大和ミュージアム」での観察／調査を中心とした“共時的分析”を行い、社会学的整理と把握—「戦艦大和」と日本社会とが取り結ぶ関係性の諸相の描出—を試みる。さらには、報告者がこれまで行ってきた「日露戦争の記憶／イメージ」との偏差をも含めて分析していく。

・学会報告②「戦艦大和のイメージ変容と戦後日本の戦争“感” —大和・ヤマト・YAMATO—」

本報告が扱うのは「戦艦大和」のイメージ／表象である。周知のように「戦艦大和」は、その巨大な体躯と有していた高い性能、また悲劇的な最期ゆえに、〈物語〉を喚起し、現在に至るまで数多のイメージ／表象文化を産出し続けている。だがそうしたイメージ／表象の“過剰さ”とは相反して、「戦艦大和」を対象とした社会学的研究はほぼ皆無である。恐らくは、従来の戦争に関する社会学的研究からは零れ落ちてしまうような場所に「戦艦大和」のイメージ／表象は棲息しているのである。

本報告ではこの「戦艦大和」のイメージ／表象の勾配及び変容を歴史的に追返し、それらと戦後日本の社会意識との相関関係を描出する。その際に、副題にある三つの「大和」表記—これはそれぞれに代表的な「戦艦大和」の表象文化に拠っている—に対応した時代区分を補助線として導入する。すなわち、吉田満『戦艦大和ノ最期』に始まる「大和」の時代：1952～60年代、次いで松本零士『宇宙戦艦ヤマト』に代表される「ヤマト」の時代：1970～90年代、そして映画『私たちの大和／YAMATO』に因る「YAMATO」の時代：2000年代、である。

戦争あるいは戦争体験に関する社会意識を論じた従来の歴史社会学的研究（例えば吉田裕『日本人の戦争観』など）によって、戦後日本社会の戦争“観”が明らかにされてきたとすれば、本報告によって試みられるのは、「戦艦大和」というユニークな光源でもって戦後日本社会の戦争“感”を照らし出すことである。

なお、上記Ⅱに関しては、2009年8月に広島県呉市に於いてフィールドワーク及び資料収集を行っている。

## 花街における芸の継承—京都北野上七軒の北野をどりを中心に—

中原逸郎

### 1. 問題の所在と研究の目的

京都において花街（かがい）は、地唄（上方唄）ともてなしの文化を継承する場として、今日の観光においても重要な資源である。格式を重んじる京都の中でも北野上七軒（上京区）は最古の花街とされ、古風な風情と芸を伝えているとの定評がある。かつて全国に点在していた花街と呼ばれる地域は近年急激に姿を消し、在りし日の記憶を残していない場所が増えている。その中であって、京都には未だ花街が存在し、観光や社交の場として存在感を示している。

しかし、花街の芸の継承は後継者問題、花街の維持など様々な課題も抱えていると考える。京都の春の風物詩の一つである北野上七軒の「北野お（を）どり」は、戦時中の芸の稽古不足など芸の継承の危機の時代を経て、未だ戦後色が濃い昭和27年（1952）年に誕生した。京都市の中心部から離れている立地、少人数での舞台演出など様々な課題を乗り越えて、今日まで花柳流を中心とするなど諸芸を伝えている「北野をどり」誕生の背景はどのようなものであったか。その継承の背景の分析から芸能に対してどのようなメッセージを読み解くべきかを研究していくことを目的とする。